

〔資料〕

戒山慧堅撰『玉蘭盆獻供儀』翻刻と解題

関口 静雄

〔解題〕

滋賀県栗東市安養寺町に所在する真言宗泉涌寺派東方山放光院安養寺は、天平十二年(七四〇)聖武天皇の勅願によって東大寺良弁が薬師如来を本尊として開山したと伝える。良弁開基伝承は近江湖南仏教の一大拠点だった金勝山金勝寺(栗東市荒張)をはじめとして湖南一帯の多くの寺院に残り、安養寺も金勝寺二十五別院の一だったという。しかし大永四年(一二二四)四月二十五日付『東方山安養寺本堂再建勸進状』は良弁僧正の事績には触れず、「承和元年(八三四)近衛関白御建立之聖跡」と記し、藤原冬嗣(七七五～八二六)の本願によって建立されたと伝える。冬嗣は天長三年(八二六)に没しているから、右の『本堂再建勸進状』を重んじれば、安養寺建立は冬嗣の遺願によるものであったことになる。いずれにしても安養寺の創始は明確ではない。

近江栗田の豪商田中適斎(一七六八～一八二二)の『近江栗田郡志』は『興福寺官務帳』を引いて、安養寺は亀山天皇(一二四九～一三〇五)の勸願によって弘長三年(一二六三)に再興されたが、四十年後の嘉元二年(一二三〇)十二月二十日に炎上したと記している。『本堂再建勸進状』にも亀山天皇の勅願所であったという記述があるから、他史料に見出せないが、本尊の薬師如来三尊像の造立年代も「十三世紀半ばを前後する頃の作例」¹でもあり、安養寺には亀山天皇と何がし深い因縁があったように思われる。

嘉元二年十二月の炎上後、安養寺はいっしか再建されたようで、『長興宿禰記』長享元年(一一八七)十月四日条、『蔭涼軒日録』同十月九日条によれば、長享元年十月四日、六角高頼討伐のため近江に親征した足利九代

將軍義尚の陣所とされている。陣所は同二十七日に下鈎真宝館に移されたが、このわずかの間に本尊が雨露に侵されるほどに堂塔房舎は損壊したという。大永四年四月の『東方山安養寺本堂再建勸進状』はおそらくこうしたことを受けて出されたものと考えられる。勸進は成就したようであるが、しかし『近江栗田郡志』によれば、元龜元年(一二五七)八月九日、織田信長の兵火に罹り、「安養寺堂舎僧房十二箇院等」はことごとく烏有に帰したと伝えている。安養寺は小堂に本尊薬師如来を安置するだけでまったく荒廃した。

貞享二年(一六八五)安養寺は復興した。同寺二世湛堂慧淑撰『東方山安養寺中興祖戒山堅和尚伝』(宝永元年(一七〇四))によると、京都の蘭軒樋口正信居士は戒山慧堅を崇敬することまことに篤く、帰依して剃髪受戒し、その妻・子・孫など一族十余人も慧堅に帰して出家した。正信居士が病没したのち、樋口氏一族は居士の遺骸をもって荒廃した安養寺を再興し、その中興第一世として慧堅を迎えたのだという。これを伝える慧淑(一六六九～一七二〇)は俗姓を樋口といい、京都の人というから正信居士の血統に相違なく、慧淑の師慧堅に対する尋常ならざる熱烈な崇敬思慕の情は、元禄四年(一六九二)に慧堅の病氣平癒を祈って書写した『血書薬師如来本願嚴功德経』によっても知ることができ、ひいて樋口一族の慧堅に寄せらる甚深の景仰心を容易に推量せしめる。

右の慧淑撰『戒山堅和尚伝』また『青龍山野中寺僧名録B本』²によれば、戒山慧堅(一六四九～一七〇四)は俗姓江上氏。筑後国久留米の人で、慶安二年十二月十八日肥後城主有馬玄蕃の家臣の子として生まれ、幼くして郷里千栄寺の書生となった。寛文五年(一六六五)十七歳の春、大蔵経刊行

を志して間もない黄檗の鉄眼道光（一六三〇～一六八二）が千栄寺の本寺千光寺で大乗起信論を講じたのを聴聞して鉄眼の膝下で出家し、同寺学頭巖宗悦禪に就いて学んだ。当初からの念願だったのであろう、慧堅は戒律を志し、曹洞の崎僧肥後法巖寺桃水雲溪の勧めで当今律宗随一の哲匠と称された慈忍慧猛（一六一〇～一六七三）を城州宇治田原の東陽山巖松院に訪ねて門下となった。慧猛は洛東泉涌寺雲龍院正専如周に学び、俊正明忍が戒律復興の拠点とした洛北槇尾西明寺平等心王院の沙弥衆に入って自誓受戒し、南都西大寺の長老高喜から伝法灌頂を受け、叡尊以来の西大寺正流と松橋流の秘璽を享けた俊才で、平等心王院一山の衆僧に推されて巖松院を司掌していた。慧堅はここで慧猛に師事して息慈戒を受けたのである。

寛文十年（一六七〇）春、慧猛が聖徳太子開創と伝える河内青龍山野中寺の中興開山に迎えられるに随従して青龍山に移り、そこで具足戒を受けた。ほどなく野中寺は槇尾西明寺・堺大鳳山神鳳寺と並んで戒律復興の三大拠点の一に数えられるに至り、律学の研鑽と実践を志す多くの俊秀が参集したが、慧堅の行業は拔群であって、延宝元年（一六七三）慧猛が洛西太秦広隆寺桂宮院を結界し四分衆法布薩を行じたとき、慧堅は慧猛に代わって説戒を勤めたほどであった。

延宝元年三月、師の慧猛が六十三歳で入寂すると、高弟慈門信光が野中寺二世を継いだ。これを機に慧堅は野中寺を出て、和泉の長曾根村に小庵を結び、また山城深草の浄土宗西山義の真宗院に籠居するなどしたが、法兄慈門の勧めで泉涌寺退塵庵に止住すると道香は市井に高まり、教説を求めて衆庶が蝟集した。折しも慈門が野中寺に灌頂壇を開くと慧堅は進んで入壇した。慈門はこれを悦び慧堅に西大寺正流と松橋流秘璽を授けた。

貞享二年、樋口氏蘭軒正信居士とその一族の篤志によって安養寺が再興され、中興開山に迎えられると、慧堅はこれを持戒持律の道場として経営した。そのことは慧堅が弟子たちに示した『雑要家訓』十二条と『雑要再訓』七条によっても明らかである。その後、元禄十一年（二六九八）同寺に灌頂壇を開くと翌十二年後董を湛堂慧淑に譲り、退耕老人と称して洛東の浄慈庵に退いた。しかし同十六年野中寺衆僧の招請によって野中寺三世住持に就いたが、翌宝永元年（一八〇四）三月四日、五十六歳で浄慈庵に

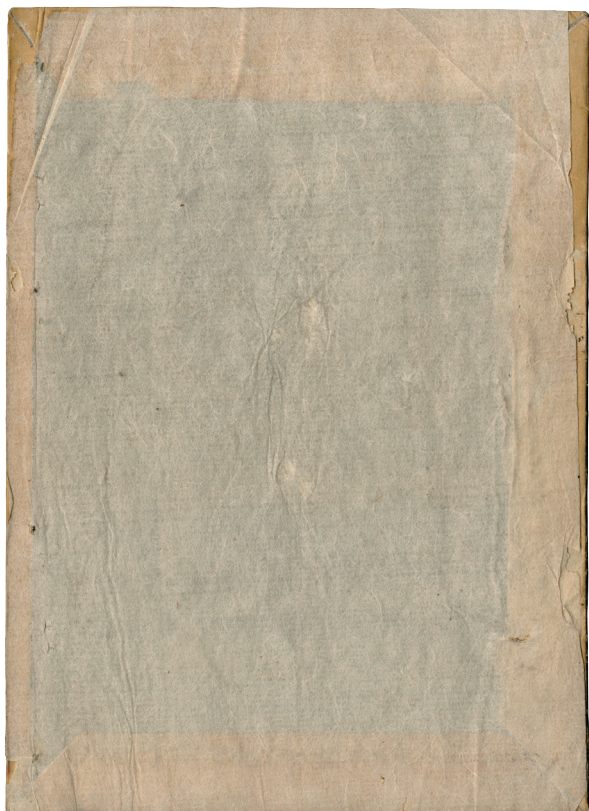
入寂した。

慧堅はその生涯を近世の仏教界を席卷した戒律復興の只中に真摯に身を投じた人であって、その持戒持律の行業はまたその著述にも及んでいる。樋口氏一族から中興開山に迎えられた慧堅は元禄二年（二六八九）に『律苑僧宝伝』³⁾十五卷七冊を版行し、翌三年に『孟蘭盆獻供儀』一冊、同五年には『近住八戒威儀録要』一冊を上梓して、慧猛に師事して以来の学業の成果を開陳している。安養寺に自筆本が伝わる『雑要家訓』『雑要再訓』には、壇越の恩に感謝すること、村民には慈悲心をもって接すること、山林の木竹を濫用せぬこと、請雨法を厳粛に勤めること等々が具体的に示されているが、『近住八戒威儀録要』にも雖僧の行すべき日常がこと細かく書き記され、また『孟蘭盆獻供儀』には仮名文をもって在家に向けて孟蘭盆の意義と由来、また各々の祖霊に対する献供の仕様とその心構えを懇切に説いている。慧堅の行実に通底するのは、師・檀越・父母の恩に感謝する心であって、『孟蘭盆獻供儀』においてはそれがとくに強調されているように思われる。

『孟蘭盆獻供儀』は『孟蘭盆獻供儀小引』七丁と『孟蘭盆獻供儀起并縁』⁴⁾十二丁から成る。その初版は元禄三年であるが、このたびはその再治本（宮島コレクション蔵）を底本として翻刻紹介する。翻刻にあたっては原文を尊重したが、やむを得ず通行字体に改めたところがある。なお翻刻文作成には鈴木香菜さん（歴史文化学科三年生）の助力を得、また安養寺住職熊谷俊亮師・前栗東歴史民俗博物館長佐々木進氏・同館松村浩氏のご親切をいただいた。御礼申上げる。

注

- 1 『企画展 東方山安養寺の歴史と美術』（平成六年十月、栗東歴史民俗博物館）所載の佐々木進氏の解説による。
- 2 『日本における戒律伝播の研究』（研究代表者稲城信子氏。平成十八年三月、元興寺文化財研究所）に所載。
- 3 『唐招提寺・律宗戒律苑僧宝伝』（関口静雄・山本博也編著。平成十九年二月、学院叢書第二輯律苑僧宝伝）（関口静雄・山本博也編著。平成十九年二月、昭和女子大学近代文化研究所）に翻刻と解題を載せた。



再治

孟蘭盆獻供儀

全

列

再治

孟蘭盆獻供儀

全

列

「表表紙見返

「表表紙

孟蘭盆獻供儀小引



佛之道以善為用。善固夥矣。而孝其端也。為道而不在其用。能為大道乎。為用而不先其端。能為溥用乎。是故佛為出世之道也。無所不善。為出世之善也。未始忘情於其親。方其成道

孟蘭盆獻供儀引

之初。諭父王于聖道。而國人亦皆化之。又升忉利天。為母說法者。三月。及父王之崩也。則躬率諸釋。負其棺以葬。至于訓諸弟子。則謂父母與補處菩薩等。許弟子減衣鉢之資。養其父母。又目連欲拯其母。則為說孟蘭盆

孟蘭盆獻供儀小引

南山 正宗

佛之道ハ以善為レ用。善固ニ夥シ矣而孝其ノ端ナリ也。為レシテ道而不レシテハ在ニ其ノ用ニ能為ニヤ大道ニ乎。為レシテ用而不レシテハ先ニ其ノ端ニ能為ニヤ溥用ニ乎。是ノ故ニ佛為ニ出世ノ之道ニ也無ニ所トシテ善ナラ。為ニ出古ノ之善ニ也。未ニ始ヨリ忘ニ情ヲ於其ノ親ニ。方ニ其ノ成道ノ

【孟蘭盆獻供儀引

〇一】

之初ニ。諭ニ父王ヲ于聖道ニ。而國人亦皆化ス之。又升ニ忉利天ニ為レ母說法スル者ノ三月。及ニ父王ノ之崩ニ也則躬ニ率ニ諸釋ニ負ニ其棺ニ以テ葬ス。至ニ于訓ニ諸弟子ニ則謂ク父母ハ與ニ補處ノ菩薩ニ等シ。許ニ弟子ト減ニシテ衣鉢ノ之資ヲ養フ其ノ父母ヲ。又目連欲レ拯ニテ其母ニ則為ニ說ニ孟蘭盆ノ

法。且囑諸弟子。歲必行之。藏中勸勉
不一而足。是以古之稱高僧賢衲者。
未有不孝其親者也。今吾有不肖之
徒。欲不先其端。自謂我出家專道。豈
非背負如來遺意乎。予不幸蚤喪父
而從師於外二十餘年矣。進不能明

孟蘭盆獻供儀引

〇二

道。退不能待母。不孝之罪無所逃。
然予惟口體之奉。未足為孝。而大孝
在資神也。原夫孟蘭盆一經。乃報恩
之大訓。資神之妙方也。故每歲當調
御歡喜之日。啟目連祭祀之儀。用致
二親之福祐。微報罔極之恩德。竊念

法。且囑諸弟子。歲必行之。藏中勸勉

不一而足。是以古之稱高僧賢衲者。

未有不孝其親者也。今吾有不肖之

徒。欲不先其端。自謂我出家專道。豈

非背負如來遺意乎。予不幸蚤喪父

而從師於外二十餘年矣。進不能明

【孟蘭盆獻供儀引

〇二】

道。退不能待母。不孝之罪無所逃也。

然予惟口體之奉。未足為孝。而大孝

在資神也。原夫孟蘭盆一經。乃報恩

之大訓。資神之妙方也。故每歲當調

御歡喜之日。啟目連祭祀之儀。用致

二親之福祐。微報罔極之恩德。竊念

不得視人之親猶已之親。非大士之志。嘗見士女之修此法者。率多不遵聖教。欲贊其父母冥福。不亦難乎。予甚嘆之。昔芝園祖師。製蘭盆獻供儀。以示祭法。其書雖存。而童蒙輩未易通焉。故數年前嘗為翻作和語。作為

孟蘭盆獻供儀引

〇三

緣起一本。依行者。不為不多矣。今茲孟秋。有感於衷。乃重為刪補。易以今名。益式祖師之供儀也。緇衣之士。其亦何事於斯。庶士女之覽之者。知道以善為用。善以孝為端。而年々罄盃蘭揀度之誠。令存亾父母。同躋於至

不レレハ得下視コト人ノ之親一猶中スルコトヲ已レカ之親上。非ニ大士ノ之

志ニ。嘗テ見下ルニ士女ノ之修ニル此法一者上。率多不レ遵一

聖教ニ。欲レストモ贊ニト其父母ノ冥福一。不亦難一カラ乎。予

甚タ嘆レス之。昔芝園祖師。製ニテ蘭盆獻供儀一

以テ示祭法一。其ノ書雖レ在セリト。而童蒙ノ輩ハ未レト易

レ通焉。故ニ數年前嘗テ為メニ翻シテ和語ト。作ニ為ス

【孟蘭盆獻供儀引

〇三】

緣起一本ヲ。依行スル者ノ不レ為レ不多カラ矣。今茲トシ

孟秋。有レ感ニルコト於衷ニ。乃重テ為シテ刪補一。易ルニ以テ今ノ

名ヲ。益シテ祖師ノ之供儀ニ也。緇衣ノ之士ノ其

亦何事ニセン於斯。庶クハ士女ノ之覽レシ之者。知道ハ

以レ善為レ用善ハ以レ孝為レ端ト。而年々罄盃

蘭揀度ノ之誠一。令三存亾ノ父母ヲシテ。同ク躋ニ於至

善之域。此予一片報親之志。故未暇較文字於和漢之間也。

元祿二年歲次己巳季冬望後三日

湖東安養比丘堅戒山和南書于

編蒲軒



孟蘭盆獻供儀引

四

善之域。此予一片報親之志。故未暇

較文字於和漢之間也。

元祿二年歲次己巳季冬望後三日

湖東安養比丘堅戒山和南書于

編蒲軒

釋氏
慧堅

戒山

【孟蘭盆獻供儀引

○四】

(白丁)

04
ウ

04
オ

佛升切利爲母說澧



孟蘭盆献供儀

五

佛切利天。歡喜園。質多樹の下にましまして。
 三月安居し給ふ。身より千の光明を放て。大千界を
 てらし。文殊に告て。のたまはく。汝。我母のもとに往ていへ。
 我こゝにあり。しばらく来りて。三宝を禮敬あれと。文
 殊往て。摩耶にまうす。摩耶聞て。踊躍悦し。す
 なはち。文殊と共に。佛の所にいたる。佛はるかに。母の来
 れるを見給ひて。須弥山鼓動の相のごとし。すなはち。
 梵音を出して。廣く。説法し給ふ。摩耶。法を聞て。す
 なはち。須陀洹果をえたりと云く。為母説法經に出たり

佛升切利爲母說澧

【孟蘭盆献供儀

○五】

佛切利天の。歡喜園。質多樹の。下にましまして。
 三月安居し給ふ。身より千の光明を放て。大千界を
 てらし。文殊に告て。のたまはく。汝。我母のもとに往ていへ。
 我こゝにあり。しばらく来りて。三宝を禮敬あれと。文
 殊往て。摩耶にまうす。摩耶聞て。踊躍悦し。す
 なはち。文殊と共に。佛の所にいたる。佛はるかに。母の来
 れるを見給ひて。須弥山鼓動の相のごとし。すなはち。
 梵音を出して。廣く。説法し給ふ。摩耶。法を聞て。す
 なはち。須陀洹果をえたりと云く。為母説法經に出たり



孟蘭盆献供儀 〇六

佛乃父淨飯王。やまひに染て。甚おもし。もろ
 とぬれは。苦くい。これ命のおはらんこと
 と慮らず。たぐうらむらくは。諸子等を。見ざ
 して。時。佛。神通を以て。はるかに
 呈氏より。難陀。阿難。羅雲と共に。身を
 虚空に。おどらし。父王のもとにいたり。大光明
 と。これて。父王の身をてらし。又。金色の
 御手を出して。その額につけ。為にひろく。
 説法し給ふ。父王大に。歡喜し。佛の御手を

徳至迦維爲父擔棺

【孟蘭盆献供儀 〇六】

佛の父。淨飯王。やまひに染て。甚おもし。もろ
 もろの臣に告げていはく。われ命のおはらんこと
 は慮らず。たぐうらむらくは。諸子等を。見ざ
 らんことを。時に佛。神通を以て。はるかに
 是をしり。難陀。阿難。羅雲と共に。身を
 虚空におどらし。父王のもとにいたり。大光明
 をはなつて。父王の身をてらし。又。金色の
 御手を出して。その額につけ。為にひろく。
 説法し給ふ。父王大に。歡喜し。佛の御手を

孟蘭盆獻供儀 并縁起

孟蘭盆と云はこれ佛弟子の孝と申。恩を報ずる法なり。孟蘭の二字は。天竺の語。唐言には。倒懸といふ。倒懸とは。飢渴のくるしみなり。盆の一字は。もとより唐言。その苦しみをすくふ。器を云なり。いはゆる。種々の浄潔の。碗鉢をもつて。種々の浄潔の。美食を盛。十方の

孟蘭盆獻供儀

〇一

僧に供養して。其父母の。倒懸の苦しみをすくふなり。これ目連尊者の母。經文をうかゞひ見るに。大目捷連。はじめ六通をえて。父母を度して。乳哺の恩と報せんとおもひ。すなはち道眼を以て。世間を觀視せしに。その亡母。餓鬼の中に生じて。飲食をみず。皮骨連立せり。目連悲哀し。鉢をもつて飯を盛。ゆいて。

孟蘭盆獻供儀 并縁起

孟蘭盆と云は。これ佛弟子の孝を申。恩を報ずる法なり。孟蘭の二字は。天竺の語。唐言には。倒懸といふ。倒懸とは。飢渴のくるしみなり。盆の一字は。もとより唐言。その苦しみをすくふ。器を云なり。いはゆる。種々の浄潔の。碗鉢をもつて。種々の浄潔の。美食を盛。十方の

孟蘭盆獻供儀

〇一

僧に供養して。其父母の。倒懸の苦しみをすくふなり。これ目連尊者の母。經文をうかゞひ見るに。大目捷連。はじめ六通をえて。父母を度して。乳哺の恩を報せんとおもひ。すなはち道眼を以て。世間を觀視せしに。その亡母。餓鬼の中に生じて。飲食をみず。皮骨連立せり。目連悲哀し。鉢をもつて飯を盛。ゆいて。

其母に餓せられた。飯猛火と化し。佛に
 食しては、目連痛哭して佛に
 まうけ。佛乃の返り。汝が母。罪おもし。
 汝一人のちからにしては。いかむともする
 ころにあらず。十方衆僧の威神の力を
 かり。まさに七月十五日。佛歡喜日。僧自恣
 の時におゐて。母のために。孟蘭盆齋
 をまうけ。佛及僧に。供養せば。はじめ
 よく。濟拔すべしと。目連。をしへのごとく。
 齋

孟蘭盆獻供儀

〇二

をまうく。その母すなはち。是日におゐて。
 餓鬼の苦しみを。まぬかるゝことをえたり。
 目連。又佛にとふていはく。未來世の。一切
 の佛才子も。かくのごとく。孟蘭盆齋を
 修すべしやと。佛のたまはく。若は比丘。比
 丘尼。國王。太子。大臣。宰相。三公。百官。万民。
 庶人を。論ずることなく。皆此法を修し。
 現在の父母は。壽命百年にして。一切苦
 惱の。うれへなく。乃至。七世の父母は。餓鬼の。

帝、孟蘭盆會、人天の中に生じじ。福樂ふくらくきはまりなからんことを。ねがふべしと。是これより孟蘭盆勝會うらんぼんしょうゑ。萬世ばんせに流通りゅうつうせり。出家しゅつげの人は通つうじて。佛法ぶつぽうをすれば。此法このほうを行おこなひ來りし事きた。まことにいふもさらなり。その在家ざいけにおるても。上かみ。天子てんしより。下しも。庶人しよじんに至いたるまで。みな是これを修しゆせずといふことなし。震旦しんだんには。齊せいの太祖たいそ。高皇帝かうこうてい。七月十五日におるて。あまねく。衆僧しゆそうを供養くやうし給ふ

孟蘭盆獻供儀

〇三

唐たうの代宗皇帝たいそうこうていは。常つねに孟蘭盆會うらんぼんゑに禁中きんちゆうにまふけて。先祖せんぞの冥福みやうふくにすゝめ。宋そうの真宗しんそう。仁宗じんそうの諸帝しよていに至いたるまでも。法ほうによりて。行おこなひ給はずといふことなし。本朝ほんてうには。齊明皇帝さいめいこうてい。はじめて。孟蘭盆供うらんぼんくをおこなひ。又群臣またぐんしんに勅ちやくし。諸寺しよじにおるて。孟蘭盆經うらんぼんぎやうを講かうじ。父母ふぼの恩おんを報ほうぜしむ。又聖武皇帝またしやうむくこうてい。孟蘭盆供うらんぼんくを宮中きやうちゆうに置おき。又司膳寺またしぜんじに。詔みことりして。此

【孟蘭盆獻供儀】

〇三

唐の代宗皇帝は。常に孟蘭盆會に禁中にまふけて。先祖の冥福にすゝめ。宋の真宗。仁宗の諸帝に至るまでも。法によりて。行ひ給はずといふことなし。本朝には。齊明皇帝。はじめて。孟蘭盆供をおこなひ。又群臣に勅し。諸寺におるて。孟蘭盆經を講じ。父母の恩を報ぜしむ。又聖武皇帝。孟蘭盆供を宮中に置。又司膳寺に。詔して。此

供をとれへしを。式と給ふ。それよりこのかた。千秋かはらず。直に今に至るまで。道俗男女。戸につたへ。家々におこなはずと。いふことなし。然れども。時未代にをよび。人淺識なれば。佛教に隨順して。盆供を。いとなむものまれなり。おほくはたゞ。父母眷属の靈に。飯麵菜果の類ひを。そなへまつり。これを盂蘭盆供と思へり。是しかながら。盂

盂蘭盆献供儀

四

蘭盆經の意と。さらしきべから。十方自恣の大徳家僧と。後して。供養を。これかふりく。父母及びそのふとして。盂蘭盆といふを。父母眷属の靈と。供養す。精霊祭とて。これを。別なるものなり。此ゆへに。孝順のこころざしをつくして。古へより。なし来りし。精霊まつりをも。おこたらず又さらに。十五日には。十方自恣の衆僧を請じて。供養し。その力によりて。

【盂蘭盆献供儀

〇四】

供をそなへしめ。ことに立て。式とし給ふ。それよりこのかた。千秋かはらず。直に今に至るまで。道俗男女。戸につたへ。家々におこなはずと。いふことなし。然れども。時未代にをよび。人淺識なれば。佛教に隨順して。盆供を。いとなむものまれなり。おほくはたゞ。父母眷属の靈に。飯麵菜果の類ひを。そなへまつり。これを盂蘭盆供と思へり。是しかながら。盂

蘭盆經の意を。さらざればなり。十方自恣の大徳衆僧を請じて。供養し。その力によりて。父母をすくふをこそ。盂蘭盆とはいふめれ。たゞ父母眷属の靈を。供養するは。精霊祭とて。その事。別なるものなり。此ゆへに。孝順のこころざしをつくして。古へより。なし来りし。精霊まつりをも。おこたらず又さらに。十五日には。十方自恣の衆僧を請じて。供養し。その力によりて。

亡者まうじやを救すくふべし。凡おま孟蘭盆そうらんぼん供くは。他た力りきを
 たのむを以もつて。本ほん意いとす。こゝを以もつて。目
 連れん尊そん者じやの。神じん通づ才さい一いつなるす。なを十じゅう方ほう
 自じ恣し僧そうの力ちからを。頼たのみて。其その母ははを濟さい抜ぼつし
 給たまふ。増まして末ま世せの人ひとをや。まますますますま誠まことをつ
 くして。十じゅう方ほう僧そうの威ゐ神じん力りきを。たのむべきことに
 こそあれ。もし誠まことをつくして。法ほうによりて。行おこなふ
 ものならば。あながちに。供く養やうの多た少せうには。よるべ
 からず。貧まつき人ひとは。一いつ搏だんの飯はん。一いつ掬くの水みづにもあれ。
 〇五

孟蘭盆献供儀

十じゅう方ほう自じ恣し僧そうを請しょうじて。供く養やうし。其その神じん力りき
 をたのまば。いかでか父ふ母ぼの靈れい。たちま地。三さん塗づ
 の苦く報ほうを。ままぬかれて。諸しよ佛ぶつの淨じやう利りに。
 生しやうぜざらん。つつらく父ふ母ぼの恩おんを。ははかりおもふ
 に。須しゆ弥みよりも高たかく。巨こ海かいよりも深ふかし。
 身みをくだき。骨ほねを粉こなにすといふとも。いいかでか。
 報ほうじつくすべき。是これとおもひつづくるにも。い
 とと。佛ほとけの慈じ恩おんのふかく。法ほう力りきの妙たえなるこ
 ととこそ。かかたじけなく。有あり難がたく侍れ。本ほん師し

釋迦如來善勝のらひとをて所
 ち。このるや、もこれが頭目髓腦を
 捨て。父母に孝養し。天地神祇も感
 動するにいたる。すでにして。成佛し。
 世に。をりたちて。大小の教法をとき。
 さまぐにこしらへ。孝順の道を教へ給ふ。
 梵網經には。父母師僧。三寶に孝順す
 べし。孝順は。至道の法なり。孝を名づけ

孟蘭盆献供儀

〇六

て戒とし。又は制止と名づくるとき。涅槃經
 には。奇なるかな。父母。われらを生育して。
 大苦惱をうく。まさに恩を報じて。隨順
 供養すべしと。き。難報經には。左の肩に
 父を持し。右の肩に母を持し。千年を
 経歴して。背上におゐて。便利をしむ
 とも。猶父母の恩を。報ずる事。あたはじ
 ととき。雜寶經には。父母のもとにおゐて。すこし
 の供養をなすに。福を得ること。はかり

釋迦如來。菩薩の。ちかひを。たて給ひし。

より。このかた。やゝもすれば。頭目髓腦を

捨て。父母に孝養し。天地神祇も。感

動するにいたる。すでにして。成佛し。

世に。をりたちて。大小の教法をとき。

さまぐにこしらへ。孝順の道を教へ給ふ。

梵網經には。父母師僧。三寶に孝順す

べし。孝順は。至道の法なり。孝を名づけ

【孟蘭盆献供儀

〇六】

て戒とし。又は制止と名づくるとき。涅槃經

には。奇なるかな。父母。われらを生育して。

大苦惱をうく。まさに恩を報じて。隨順

供養すべしと。き。難報經には。左の肩に

父を持し。右の肩に母を持し。千年を

経歴して。背上におゐて。便利をしむ

とも。猶父母の恩を。報ずる事。あたはじ

ととき。雜寶經には。父母のもとにおゐて。すこし

の供養をなすに。福を得ること。はかり

たり。もろく不順とりた。罪底好りし
 もろく今成佛するもろく。えりこ
 たり。今成佛するもろく。えりこ
 勝子経より。我とく無上正真の
 道成でびかしの。皆孝徳よ
 道成でびかしの。皆孝徳よ
 乃過とくもの。師。実なりと
 と命終して。かならず地獄にいり。其舌
 根とくろり好食美果等と得て。

孟蘭盆献供儀

父母師僧ふあへずして。まづみづから食
 飲れば。餓鬼の中におち。後生れて。人と
 なりても。貧窮なりとき。中陰經には。
 児生れて。三歳にいたるまで。母の乳を飲
 こと。一百八十斛なりとき。増一阿含經に
 一生補處の菩薩の功德と。一等なりと
 とき。又佛。もろくの比丘を告たまはく。
 若衆生ありて。返復をしたらば。此人うやまふ

なし。すこしの不順をなすに。罪を得ること
 またはかりなしとき。又むかしの孝養に
 よりて。今成佛することを。えたりとき
 睽子經には。我をして。とく無上正真の
 道を成ぜしむるものは。皆孝徳によれり
 とくき。地獄經には。人の弟子として。師僧
 の過をとくものは。たとひ師。実なりと
 も命終して。かならず地獄にいり。其舌
 根をくらはる。もし好食美果等を得て。

【孟蘭盆献供儀

〇七】

父母師僧にあたへずして。まづみづから食
 飲すれば。餓鬼の中におち。後生れて。人と
 なりても。貧窮なりとき。中陰經には。
 児生れて。三歳にいたるまで。母の乳を飲
 こと。一百八十斛なりとき。増一阿含經に
 は。父母に孝順し。供養する功德果報は。
 一生補處の菩薩の功德と。一等なりと
 とき。又佛。もろくの比丘を告たまはく。
 若衆生ありて。返復をしたらば。此人うやまふ

小恩も尚すれどもいふいふや
 大恩も尚すれどもいふいふや
 百千由旬なりともなを我にちかづく
 小しれども我常小歎答も家主
 ありて返復せりしは是より大
 恩すら尚おもはず。いかにいんや小恩を
 や。かれ我にちかづかず。我もかれに近づか
 ず。たとひ僧伽梨を被て。わが左右にあ
 りとも。此人猶とをし。是故に比丘。まさに

孟蘭盆献供儀

〇八

返復せりしとありて下せぬ。心地観
 經は。若衆生ありて。不孝を行じ。母を
 一時も恨心をおこさしめ。怨念の
 辞少分も生じぬれば。子すなはち。言にし
 たがひ。苦難にあふ。若男女ありて。母の教
 により。顔色を乖順して。相違せざれば。
 一切の災難。ことごとく消除し。諸天擁護
 して。常に安樂なりととき。觀無量壽
 經には。父母に孝養するは。三世の諸佛。淨

べし。小恩すら尚わすれず。いかにいはんや
 大恩をや。たとひ此間をはなるゝこと。
 百千由旬なりとも。なを我にちかづく
 ことにならず。我常に歎答す。若衆生

ありて。返復することを。しらざるものは。大
 恩すら尚おもはず。いかにいんや小恩を
 や。かれ我にちかづかず。我もかれに近づか
 ず。たとひ僧伽梨を被て。わが左右にあ
 りとも。此人猶とをし。是故に比丘。まさに

【孟蘭盆献供儀】

〇八

返復することをおもふべしととき。心地観
 經には。若衆生ありて。不孝を行じ。母を
 一時も恨心をおこさしめ。怨念の
 辞少分も生じぬれば。子すなはち。言にし
 たがひ。苦難にあふ。若男女ありて。母の教
 により。顔色を乖順して。相違せざれば。
 一切の災難。ことごとく消除し。諸天擁護
 して。常に安樂なりととき。觀無量壽
 經には。父母に孝養するは。三世の諸佛。淨

業此正因なりと云。父母恩重經には。父
母の恩徳。はかりなく。ほとりなし。たとひ
人ありて。左の肩に父をになひ。右の
肩に母をになひ。須弥山をめぐること。
百千匝をふるとも。父母の深恩を。報ず
ることあたはじ。恩を報ずることを。えむと
おもはざ。父母のために。此經を書写し。
父母のために。此經を讀誦し。父母のた
めに。罪愆を懺悔し。父母のために。三寶

孟蘭盆献供儀 ○九

を供養し。父母のために。齋戒を受持し
父母のために。布施修福せよ。若よく。
かくのごとくになるときは。孝順の子とせむ。
此行をなさざるは。これ地獄の人なりと
とき給ふ。かくのごときの文。ひろくは。法苑
珠林等の。書に見えたり。悉くしるしかたし。
世の人。たやすく。釋氏は。父を無し。母を
無すといふ。見聞の。ひろからざるにあらず
や。しかるに。孝に二つあり。一には世間の孝

業の正因なりと云。父母恩重經には。父
母の恩徳。はかりなく。ほとりなし。たとひ
人ありて。左の肩に父をになひ。右の
肩に母をになひ。須弥山をめぐること。
百千匝をふるとも。父母の深恩を。報ず
ることあたはじ。恩を報ずることを。えむと
おもはざ。父母のために。此經を書写し。
父母のために。此經を讀誦し。父母のた
めに。罪愆を懺悔し。父母のために。三寶

【孟蘭盆献供儀 ○九】

を供養し。父母のために。齋戒を受持し
父母のために。布施修福せよ。若よく。
かくのごとくになるときは。孝順の子とせむ。
此行をなさざるは。これ地獄の人なりと
とき給ふ。かくのごときの文。ひろくは。法苑
珠林等の。書に見えたり。悉くしるしかたし。
世の人。たやすく。釋氏は。父を無し。母を
無すといふ。見聞の。ひろからざるにあらず
や。しかるに。孝に二つあり。一には世間の孝

二、出世間の孝なり。その情よこすべし。そ
 れ形とそよころ。世間れ孝なり。その性
 小なり。その神とたをくらふ。出世れ
 孝なり。これゆへに。世間の孝は。一
 乃禮法とほり。時よこすべし。衣食の
 資具を供し。出世れ孝とほり。三世
 遠見といら。機にしたがひ。顕密の教
 法とすむ。蓮池大師のいはく。その親
 とせむるに。齋戒念佛といはく。ながく

孟蘭盆献供儀

〇十

六趣をこれき。蓮胎に質を托し。したしく
 淨土と見よ。不還轉を得せしむる
 出世間の孝と名づく。まことなる哉。
 人の子の。劬勞の恩に報ずる。こゝ
 小にわら。大なりとす。世の人。その子の我
 孝ならんことを。こひねがへども。みづから。
 その心をおし。その身をかるめて。その親
 孝養をつくすもの。まれなり。老たる
 少も。父母世にいまさば。すゝめて。齋戒

二には。出世間の孝なり。その情にしたがひ。そ
 の形をたすくるは。世間の孝なり。その性
 にしたがひ。その神をたすくるは。出世間の
 孝なり。このゆへに。世間の孝を以ては。一世
 の禮法をまもり。時にしたがつて。衣食の
 資具を供し。出世間の孝を以ては。三世
 の遠見をひらき。機にしたがひ。顕密の教
 法をすゝむべし。蓮池大師のいはく。その親
 をすゝむるに。齋戒念佛を以てし。ながく

【孟蘭盆献供儀

〇十】

六趣をはなれ。蓮胎に質を托し。したしく
 弥陀を見たてまつり。不還轉を得せしむる
 を。出世間の孝と名づく。まことなる哉。
 いへること。人の子の。劬勞の恩に報ずる。こゝ
 におるて。大なりとす。世の人。その子の我
 孝ならんことを。こひねがへども。みづから。
 その心をおし。その身をかるめて。その親
 孝養をつくすもの。まれなり。老たる
 少も。父母世にいまさば。すゝめて。齋戒

念佛とす。父母世にさるば常小はせり。作善追福とす。又年々七月十五日に孟蘭盆齋をまふけ。佛におよび十方の自恣僧に供養し。ことには父母の深恩を報答し。すべては法界の衆生に。回向すべし。凡善根を修すれども。回向の心。あまねからざれば。その功德。かぎりあり。必修するところの善は。ひろく衆生に。ほどこすべきなり。まして佛も。よろづの生

孟蘭盆献供儀

〇十一

どういふなり。皆ひとしく。父母なりと。親を愛して。人におよぼすこそ。道と。は云めれば。まづ今生の父母に。孝順し。次て。生々の父母に。およぼすべし。ゆへにこそ。芝園祖師も。如来にならひて。まづ二親を度し。目連にならひて。まづ亡母をすくはむとは。ちかひ給ふらめ。されば。古への。高僧名鑑と。稱する人。いまだ

念佛せしめ。父母世をさらば。常につとめて。作善追福すべし。又年々の七月十

五日には。孟蘭盆齋をまふけ。佛。および

十方の自恣僧に供養し。ことには。父母の

深恩を報答し。すべては。法界の衆生に。

回向すべし。凡善根を修すれども。回向の

【孟蘭盆献供儀

〇十一】

としけるものは。皆ひとしく。父母なりと

とき給ふをや。しかはあれど。わきて其

親を愛して。人におよぼすこそ。道と

は云めれば。まづ今生の父母に。孝順し。次

て。生々の父母に。およぼすべし。ゆへにこそ。

其親に孝なりけり。道興律師
 命をすて。命をかるめ。乱賊の中
 に入て。母をすくひ。道紀法師は。常に母を
 荷て。聴学し。道明禪師は。蒲履を
 作りて。母をやしなへり。かくのごときの賢
 孝の儔。つぶさにあげがたし。それがし。故
 郷をはなれて。九二十餘年。うらむら
 くは。常に親のかたはらに。侍して。孝養
 をつくすこと。あたはさることを。はるかに。古
 風つくと。いふは。さるる。ふるまひ。古
 風を。千里の外にのぞみ。みづから不孝
 をもつて。母に謝す。母のいはく。我を諭
 すに。佛道をもつてする。是大孝にあ
 らずやと。又いはく。我を帰省するによつ
 て。みづから守るところを。さまざまぐべからずと。
 おもひみるに。わが母。佛道の遠理に。くらし
 といへども。丈夫の心ざし。あるがごとし。むかし
 明教大師。はじめ道を。四方にとはんと。し
 給ふとき。郷人。これをとゞむるあり。其母

孟蘭盆献供儀

〇十二

【孟蘭盆献供儀

〇十二】

乃いよく世をてに佛よまじりてれ道と
ほくめし。宜かり。我母と愛と。母
滞らしむむ。復しにいとく。たうと
り。我母。これにたぐふべきにあ
り。それ歸有するに。月字と
と。復しに。いとく。明教の
まじりて。明教の
あはれ。復しに。明教の
人とならんことを。しづかに。おもひつゞくれは。

孟蘭盆献供儀

〇十三

涙漣然としてくだり。母の言葉のまたしが
たくて。こゝに及べり。見む人。親愛する
ころに。辟すといふのそしり。われいかにして
か辞せん。むかし芝蘭祖師。蘭盆献供儀
といへる。書をあらはして。天下に流布し。益
供の法をしめし給ふ。しかれども士女の
ひらき見るに。たへざるものおほし。このゆへに。
三五年がさき。如來の金言。祖師の供儀
によつて。もろこしの。こはき文を。此國の。耳

のいはく。汝すてに。佛にしたがへり。その道を
つとめんこと。宜なり。など愛を以て。汝を
滞らしめむと。まことにいみじく。たうとかり
ける心なり。我母。これにたぐふべきにあ
ねど。その歸有するによりて。自守るところ
を。さまざまざれといへる一言は。おほくゆづる
ましきをや。たゞはづらくは。それがし。明教の
あとを学ぶことあたはずして。徒に。背恩の
人とならんことを。しづかに。おもひつゞくれは。

【孟蘭盆献供儀

〇十三】

涙漣然としてくだり。母の言葉のまたしが
たくて。こゝに及べり。見む人。親愛すると
ころに。辟すといふのそしり。われいかにして
か辞せん。むかし芝蘭祖師。蘭盆献供儀
といへる。書をあらはして。天下に流布し。益
供の法をしめし給ふ。しかれども士女の
ひらき見るに。たへざるものおほし。このゆへに。
三五年がさき。如來の金言。祖師の供儀
によつて。もろこしの。こはき文を。此國の。耳

かねより解とかへて。孟ぼん供くの縁えん起ぎ。一くわん卷まき
 乃すなは士し女にょ。たまままく。感かんずるところありて。前まへ
 儀ぎと名なづく。ねがふところは。貴き賤せん老ろう少せうと
 自じ他たの父ふ母ぼをして。すみやかに。惡あく趣しゆをは
 かね。おなじく淨じやう刹せつにいたらしめむと也

孟蘭盆献供儀

〇十四

なれたる辞ことばにかへて。盆ぼん供くの縁えん起ぎ。一くわん卷まき

をあらはし。いさゝか。父ふ母ぼの恩おんにむくふ。樂げう善ぜん

の士し女にょ。したがおこなふもの。おほし。今ことし年ねん

孟まう秋しゅう。たまままく。感かんずるところありて。前まへの

文ぶんを。刪せん補ほしさだめて。孟うらん蘭ぼん盆げん獻けん供く

儀ぎと名なづく。ねがふところは。貴き賤せん老ろう少せうと

なく。佛ぶつ教けうに隨ずい順じゆんして。盆ぼん供くをいとなみ。

自じ他たの父ふ母ぼをして。すみやかに。惡あく趣しゆをは

なれ。おなじく淨じやう刹せつにいたらしめむと也

【孟蘭盆献供儀

〇十四】

(白丁)

目連說盆供母即生天上



目連餽母飯忽化火炭



孟蘭盆獻供儀

〇十五

目連說盆供母即生天上

目連餽母飯忽化火炭

【孟蘭盆獻供儀

〇十五】

盂蘭盆獻供儀

凡盂蘭盆供を修せむとおもはゞ。まつ力を
つくして。道場を莊嚴し。百味。五果。
香油。挺燭等の供養物を。そなへおき。
みづから。身口意をきよめ。道場にいたり。
焼香禮拜し。をはつて。長跪合掌し。
あまねく。三寶を請ぜし。これに。六位
あり。才一に。本師釋迦如来を請じ。才

盂蘭盆獻供儀

○十六

二に。盂蘭盆經藏を請じ。第三に。十
方自恣の菩薩僧を請じ。才四に。十方
自恣の縁覺僧を請じ。才五に。十
方自恣の聲聞僧を請じ。才六に。十
方自恣の。聲聞僧を請じ。才六に。
目連尊者を請ぜり。返すくはして。
自恣僧。わが誠を鑒み。わが請に。したが
ひ。道場に降臨し。我供養をうけ給ふ
こと。かならず誠をつくすべし。ゆめく。

盂蘭盆獻供儀

凡盂蘭盆供を。修せむとおもはゞ。まつ力
をつくして。道場を莊嚴し。百味。五果。
香油。挺燭等の。供養物を。そなへおき。
みづから。身口意をきよめ。道場にいたり。
焼香禮拜し。をはつて。長跪合掌し。
あまねく。三寶を請ぜし。これに。六位
あり。才一に。本師釋迦如来を請じ。才

【盂蘭盆獻供儀

○十六】

二に。盂蘭盆經藏を請じ。第三に。十
方自恣の菩薩僧を請じ。才四に。十方
自恣の縁覺僧を請じ。第五に。十
方自恣の。聲聞僧を請じ。才六に。
目連尊者を請ぜり。返すくはして。
自恣僧。わが誠を鑒み。わが請に。したが
ひ。道場に降臨し。我供養をうけ給ふ
こと。かならず誠をつくすべし。ゆめく。

釋迦牟尼佛。たゞねがはくは。道場に降臨して。わが供養をうけ給へ。三たび請じて一礼せよ。
 一心に請じたてまつる。蘭盆至教。報親拔苦法門。修多羅藏。たゞねがはくは。道場に降臨して。わが供養をうけ給へ。
 一心に請じたてまつる。十方自恣。得道聖賢。菩薩僧衆。たゞねがはくは。道場に降臨して。わが供養をうけ給へ。
 賢。聲聞僧衆。たゞねがはくは。道場に降臨して。わが供養をうけ給へ。
 一心に請じたてまつる。報親入道。起教利生。

孟蘭盆献供儀 〇十七

卒にすべからず。その請する文は。下に列ぬるがごとし

一心に請じたてまつる。蘭盆教主。久報親恩。釋迦牟尼佛。たゞねがはくは。道場に降臨して。わが供養をうけ給へ。三たび請じて一礼せよ。
 一心に請じたてまつる。蘭盆至教。報親拔苦法門。修多羅藏。たゞねがはくは。道場に降臨して。わが供養をうけ給へ。
 一心に請じたてまつる。十方自恣。得道聖賢。菩薩僧衆。たゞねがはくは。道場に降臨して。わが供養をうけ給へ。

【孟蘭盆献供儀 〇十七】

賢。菩薩僧衆。たゞねがはくは。道場に降臨して。わが供養をうけ給へ。
 一心に請じたてまつる。十方自恣。得道聖賢。聲聞僧衆。たゞねがはくは。道場に降臨して。わが供養をうけ給へ。
 一心に請じたてまつる。報親入道。起教利生。

目連尊者どもねがはくは。道場に。降臨して。わが供養をうけ給へ。

請じおはりなば。次に三寶と称歎し。咒願すべし。

釋迦と。真教法と。三乘の賢聖と。目連尊者ども。稽首してまつる。われいま。教をうけて。親恩を報ず。ねがはくは。慈悲をうごかして。讚嘆をゆるし給へ。それらとれく。所生の父母の。罔極深恩

盂蘭盆献供儀

〇十八

以報答せしがよし。飯。百味。五果。香油。挺燭をそなへて。三寶と。十方の自恣大徳衆僧とに。供養したてまつる。ねがはくは。現在乃父母をして。壽命百年。一切苦惱のうせへなく。乃至七世の父母。餓鬼のくるしみをなれ。諸佛の國に生じ。福樂きはまふ。この熏修とらうけて。ともに利樂よう

目連尊者。たゞねがはくは。道場に。降臨して。わが供養をうけ給へ。

請じおはりなば。次に三寶を称歎し。咒願すべし。

釋迦と。真教法と。三乘の賢聖と。目連尊者とを。稽首したてまつる。われいま。教をうけて。親恩を報ず。ねがはくは。慈悲をうごかして。讚嘆をゆるし給へ。それらとれく。所生の父母の。罔極深恩

【盂蘭盆献供儀

〇十八】

を。報答せんがために。飯。百味。五果。香油。挺燭をそなへて。三寶と。十方の自恣大徳衆僧とに。供養したてまつる。ねがはくは。現在の父母をして。壽命百年。一切苦惱のうせへなく。乃至七世の父母。餓鬼のくるしみをなれ。諸佛の國に生じ。福樂きはまふ。この熏修をうけて。ともに利樂にう

咒願しをはりて。次に。本師釋尊の。名号をとなへよ。あるひは七返。あるひは二十一返。時にしたがひて。至心に称念すべし。

南無大孝釋迦牟尼佛。名号をとなへをはりて。次に前に請せしところの。三寶を禮すべし。すなはち又六位あり。第一には。本師釈迦牟尼仏。才二には。孟蘭盆経蔵。才三には。菩薩僧。

孟蘭盆献供儀 十九

才四には。縁覚僧。才五には。聲聞僧。第六には。目連尊者なり。をのく。となふるにしたがひ。至誠に一禮すべし。祖師の供儀には。讚歎の文。ありといへども。今は在家の士女のため。その要を示すがゆへに。これを畧せり。

一心頂禮。南無蘭盆教主。久報親恩。釋迦文佛。一心頂禮。蘭盆至教。報親拔苦法門修多。

咒願しをはりて。次に。本師釋尊の。

名号をとなへよ。あるひは七返。あるひは

二十一返。時にしたがひて。至心に称念す

べし。

南無大孝釋迦牟尼佛

名号をとなへをはりて。次に前に請せし

ところの。三寶を禮すべし。すなはち又

六位あり。第一には。本師釈迦牟尼仏。才

二には。孟蘭盆経蔵。才三には。菩薩僧。

【孟蘭盆献供儀 〇十九】

才四には。縁覚僧。才五には。聲聞僧。第六

には。目連尊者なり。をのく。となふるに

したがひ。至誠に一禮すべし。祖師の供儀

には。讚歎の文。ありといへども。今は在家

の士女のため。その要を示すがゆへに。こ

れを畧せり

一心頂禮。南無蘭盆教主。久報親恩。釋迦

文佛

一心頂禮。蘭盆至教。報親拔苦法門修多

羅藏

一心頂禮十方自恣得道聖賢善薩僧衆
一心頂禮十方自恣得道聖賢聲聞僧衆
一心頂禮報親入道起教利生目連尊者
礼しおはらば次にひざまづき存亡の父母
を追想し至誠に懺悔すべし凡懺悔
といふは往にし過を悔来れる善を修
する義なればたとひ在家の人なり

孟蘭盆獻供儀

二三

此盆供の日にあたりてはよろしく
父母にかはりて三帰五戒八戒等法と
うけ下乃文をとなへて懺悔を修すべ
しなりそれより深ふして常に持
戒修善の人はいよく可也
至心に懺悔すわれら所生の父母多世乃
親縁みづから真常にそむきとこしなへに
生死にながる無明にしたがつて倒想し欲
境にしたがつて攀縁す六情をほしひま

羅藏

一心頂禮 十方自恣 得道聖賢 菩薩僧衆
一心頂禮 十方自恣 得道聖賢 緣覺僧衆
一心頂禮 十方自恣 得道聖賢 聲聞僧衆
一心頂禮 報親入道 起教利生 目連尊者
礼しおはらば次にひざまづき存亡の父母
を追想し至誠に懺悔すべし凡懺悔
といふは往にし過を悔来れる善を修
する義なればたとひ在家の人なり

【孟蘭盆獻供儀

〇二十】

とも。此盆供の日にあたりては。よろしく
父母にかはりて。三帰。五戒。八戒等の。法を
うけ。下の文をとなへて。懺悔を修すべ
きなり。そのころさし深ふして。常に持
戒修善の人は。いよく可也
至心に懺悔す。われら所生の父母。多世の
親縁。みづから真常にそむき。とこしなへに。
生死にながる。無明にしたがつて。倒想し。欲
境にしたがつて。攀縁す。六情をほしひま

ぼくして、ひくく十悪とほくく貪嗔
 愚見殺盗邪淫兩舌惡口ひく欺誣
 誑妄言さうも誑惑とさうのどけ
 誑とひく。酒とをひく。音
 色に僧尼を慢辱し佛法を輕凌し
 衆生の血肉を食噉し無量の含靈を
 傷殘し。萬劫の殃をおもはず。たゞ一時の
 美をかへりみる。あるひは。現に厄難にあひ。
 あるひは。のちに。沈淪をうけん。かたじけなく。

五蘭盆献供儀

〇三十一

心をおこして。佛に帰することをえたり。理。身
 をおさめて。徳に報ずべし。さいはいに。佛
 歡喜日。僧自恣の時にあひ。あふひで調
 御の法門にしたがひ。もつて孟蘭盆の供
 を奉す。たゞおもんみれば。生緣義おもく。
 哀慕情ふかし。これによつて。たやすく。瑕
 疵のをべ。かはつて。懺悔をのぶ。三寶威神
 の加被。衆僧功行の冥熏によつて。彼罪
 根をして。俱時に除滅せしめ。亡没は。たま

まにして。ことさらに十悪をつくる貪。嗔
 邊見。殺。盜。邪淫。兩舌。惡口もつて欺誣し。
 綺語。妄言。しかも誑惑す。しかのみならず。
 財をおしみ。色にすさみ。酒をたのしみ。音
 をたしむ。僧尼を慢辱し。佛法を輕凌し。
 衆生の。血肉を食噉し。無量の含靈を。
 傷殘す。萬劫の殃をおもはず。たゞ一時の。
 美をかへりみる。あるひは。現に厄難にあひ。
 あるひは。のちに。沈淪をうけん。かたじけなく。

【孟蘭盆献供儀】

〇二十一

心をおこして。佛に帰することをえたり。理。身
 をおさめて。徳に報ずべし。さいはいに。佛
 歡喜日。僧自恣の時にあひ。あふひで調
 御の法門にしたがひ。もつて孟蘭盆の供
 を奉す。たゞおもんみれば。生緣義おもく。
 哀慕情ふかし。これによつて。たやすく。瑕
 疵のをべ。かはつて。懺悔をのぶ。三寶威神
 の加被。衆僧功行の冥熏によつて。彼罪
 根をして。俱時に除滅せしめ。亡没は。たま

此の如く佛國にうつして。ながく冥途を脱し。
 生存は。ことぶきを。人間にたもつて。つねに
 病悩なく。善根いよくかたく。正信ますく
 ふかく。ともに輪廻をいで。ことごとく。安養
 に生せん。無縁あまねくおほひ。感あるは。つ
 るにつうぜん。ねがはくは。哀憐をたまはつて。
 俯して。護念をなし給へ。一へん。時の早晚にしたがふべし
 懺悔しをはりなば。次に座につき。盂蘭
 盆經を讀誦せよ。あるひは餘經。或は
 密呪。あるひは佛号。その機にしたかひ
 て。つとむべし

盂蘭盆獻供儀

〇二十一

佛説孟蘭盆經

西晋三藏法師竺法護奉 詔譯

聞きこてかくれごとく一時佛舎衛國祇樹
給孤獨園に。母ははすす大目犍連だいもくけんれんとて
六通ろくつうをえ父母を度して乳哺にゅうほの恩おんを
報はつぜんと欲ほつすすなはち道眼だうげんをもつて
世間せけんを觀視くわんしすその亡母まうもをみるに餓鬼がきの
中なかに生しやうじて飲食おんじきをみず皮骨連ひこつれん立りうせり
目連もくれん悲哀ひあいしすなはち鉢はちをもつて飯いひを

孟蘭盆獻供儀

二三三

あり。往ゆいてその母ははに餉かれいす母鉢はちの飯いひをえ
てすなはち左ひだりの手てをもつて鉢はつをさへ右みぎの
手てに食じきをとる食じきいまだ口くちにいらざるに化けして
火炭くはたんとなりつるに食じきすることえず目連もくれん
おほいにさけび悲號ひがう涕泣ていきうしてはせかへり
佛ほとけにまうして具ぐにのぶることかくのごとし
ほとけのたまはく汝なんぢが母はは罪根ざいこんふかくむす
べり汝なんぢ一人ひとりの力ちからにしてはいかんともする所ところ
あらず汝なんぢ孝順けうじゆんの聲こゑ天地てんちをうごかすといふ

佛説孟蘭盆經

西晋三藏法師竺法護奉 詔譯

聞きこることかくのごとし一時佛舎衛國祇樹
給孤獨園に。母ははすす大目犍連だいもくけんれん
六通ろくつうをえ父母を度して乳哺にゅうほの恩おんを
報はつぜんと欲ほつすすなはち道眼だうげんをもつて
世間せけんを觀視くわんしすその亡母まうもをみるに餓鬼がきの
中なかに生しやうじて飲食おんじきをみず皮骨連ひこつれん立りうせり
目連もくれん悲哀ひあいしすなはち鉢はちをもつて飯いひを

孟蘭盆獻供儀

二三三

あり。往ゆいてその母ははに餉かれいす母鉢はちの飯いひをえ
てすなはち左ひだりの手てをもつて鉢はつをさへ右みぎの
手てに食じきをとる食じきいまだ口くちにいらざるに化けして
火炭くはたんとなりつるに食じきすることえず目連もくれん
おほいにさけび悲號ひがう涕泣ていきうしてはせかへり
佛ほとけにまうして具ぐにのぶることかくのごとし
ほとけのたまはく汝なんぢが母はは罪根ざいこんふかくむす
べり汝なんぢ一人ひとりの力ちからにしてはいかんともする所ところ
あらず汝なんぢ孝順けうじゆんの聲こゑ天地てんちをうごかすといふ

天神。地祇。邪魔。外道の居士。天王
 神も。また。いかんともすること。あたはじ。まさにす
 べからく。十方衆僧の。威神の力をもつて。
 すなはち解脱をうべし。われ今まさに。救済
 の法をときて。一切の難をして。みな憂
 苦を。はなれしむべし。佛。目連につけたまはく。
 十方の衆僧。七月十五日は。僧自恣の時な
 り。まさに七世の父母。および現在の父母。厄
 難の中の。ものゝために。飯。百味。五果。汲灌
 乃益蓋。香油。挺燭。牀にしく臥具と。それ
 盆。世の甘味をばくして。もつて。盆の中に
 へ。世の甘味をつくしてもつて。盆の中に
 つけ。十方の大徳。衆僧に供養すべし。この
 日にあたつて。一切の聖衆。あるひは。山間にあ
 つて。禪定し。或は。四道果をえ。或は樹下
 にあつて。經行し。あるひは六通自在にして。
 教化し。声聞縁覺。或は。十地の菩薩。大
 人権化の比丘。大衆の中にあつて。みなお
 なじく。一心に。鉢和羅飯をうく。清淨の

孟蘭盆献供儀 〇二十四

【孟蘭盆献供儀 〇二十四】

盆。世の甘味をつくしてもつて。盆の中に
 へ。世の甘味をつくしてもつて。盆の中に
 つけ。十方の大徳。衆僧に供養すべし。この
 日にあたつて。一切の聖衆。あるひは。山間にあ
 つて。禪定し。或は。四道果をえ。或は樹下
 にあつて。經行し。あるひは六通自在にして。
 教化し。声聞縁覺。或は。十地の菩薩。大
 人権化の比丘。大衆の中にあつて。みなお
 なじく。一心に。鉢和羅飯をうく。清淨の

戒を具して。聖衆の道。其徳。汪洋たり。これ此等の自恣の僧を。供養することあるものは。現世の父母。六親眷属。三塗の苦しみを。出ること。をえて。時に應じて。解脱し。衣食。自然なるべし。若父母。現在のものは。福樂百年ならん。若七世の父母は。天に生じ。自在に化生して。天の華光に。いりなん。時に佛。十方の衆僧に。勅したまはく。皆まづ施主家のために。咒願して。

孟蘭盆献供儀

〇二十五

七世の父母を願じ。禅定意を行じ。然してのち食をうけよ。初めに食をうくる時。まづ佛前。塔寺の中の。佛前に安在して。衆僧咒願し。をはりて。すなはち。みづから食をうくべし。時に目連比丘。および大菩薩衆。みなおほいに歡喜し。目連。悲啼泣の聲。釋然として。除滅す。このとき目連の母。すなはち。この日におゐて。一劫。餓鬼の苦しみを。脱することをえたり。目連また。佛に

孟蘭盆献供儀

〇二十五

七世の父母を願じ。禅定意を行じ。然してのち食をうけよ。初めに食をうくる時。まづ佛前。塔寺の中の。佛前に安在して。衆僧咒願し。をはりて。すなはち。みづから食をうくべし。時に目連比丘。および大菩薩衆。みなおほいに歡喜し。目連。悲啼泣の聲。釋然として。除滅す。このとき目連の母。すなはち。この日におゐて。一劫。餓鬼の苦しみを。脱することをえたり。目連また。佛に

悔してまうりく。才子が所生の母は。三
 寶功德れらう。衆僧威神乃らう。彼
 うもむりてん。うらうらひなり。未來世
 乃。一切の佛才子もまた。孟蘭盆を奉し
 て。親五れ父母。乃至七世の父母。救度
 するに。さうりやとせんや。いあや。佛れの
 返り。おほいによしごころよくとへり。我ま
 さ。とかんとおもふ。汝いままたとふ。善男子。
 小。ころんとおひり。汝いままたとふ。善男子。
 中。比丘。比丘尼。國王。太子。大臣。宰相。三公

孟蘭盆献供儀

○三十一

百官。萬民庶人の。慈孝を行ずるものは。
 此れも。所生の。現在の父母。過去七代の
 父母れ。七月十五日。佛歡喜日。僧自
 恣。乃日。おわく。百味の飲食をもつて。
 孟蘭盆。盆。中。おと。十方。自恣。僧。
 中。く。親五の父母。乃至。壽命。百年
 かく。乃至七世の父母。威神の。さうり
 かく。人。天。中。お。福樂。さ。は。ま。り。な

まうしてまうさく。才子が所生の母は。三
 寶功德のちから。衆僧威神の。ちからを
 かふむることを。うるがゆへなり。もし未來世
 の。一切の佛才子もまた。孟蘭盆を奉し
 て。現在の父母。乃至。七世の父母を。救度
 すべきこと。しかるべしとせんや。いなや。佛のた
 まはく。おほいによしごころよくとへり。我ま
 さ。とかんとおもふ。汝いままたとふ。善男子。
 もし。比丘。比丘尼。國王。太子。大臣。宰相。三公

【孟蘭盆献供儀】

○三十一

百官。萬民庶人の。慈孝を行ずるものは。
 みなまづ。所生の。現在の父母。過去七代の
 父母のために。七月十五日。佛歡喜日。僧自
 恣の日におゐて。百味の飲食をもつて。
 孟蘭盆の中にをき。十方の。自恣僧に
 ほどこし。現在の父母をして。壽命。百年
 にして。やまひなく。一切苦惱の。うれへも
 なく。乃至七世の父母。威神の苦しみを
 なれ。人天の中に生じ。福樂。きはまりな

かゝるをせしむ。ねがふべし。この佛才子。孝順
順成候。よりし。の。返ら念く。申す。は
れ。父母乃至七世の父母を憶し。年々
乃七月十五日。常に孝慈をもつて。所
生れ父母に。佛に。僧に。ほどこして。もつて。父
母に。佛に。養。慈。愛の恩を報ずべし。もし
一切の佛才子。まさにこの法を奉持す
べし。時に目連比丘。四輩の弟子。歡喜

孟蘭盆献供儀

〇二十七

三々奉持し。次。孟蘭盆
讀經念佛等。をばらば。次に。孟蘭盆
供養の。功德をもつて。父母および
一切衆生に。回向し。ともに淨土に
生ぜん。ねがふべし
ねがはくは。盆供所生の善をもつて。
父母劬勞の徳を。報答し。存せる者
は。富樂にして。壽きはまりなく。亡せ
る者は。苦をはなれて。安養に生じ

からしめむと。ねがふべし。この佛才子。孝
順を修するものは。まさに念くの中に。つ
ねに。父母乃至。七世の父母を憶し。年々
の七月十五日に。常に孝慈をもつて。所
生の父母をおもひ。ために孟蘭盆を
なし。佛および。僧にほどこして。もつて。父
母の長。養。慈。愛の恩を報ずべし。もし
一切の佛才子。まさにこの法を奉持す
べし。時に目連比丘。四輩の弟子。歡喜

【孟蘭盆献供儀

〇二十七】

して奉行しき。
讀經念佛等。をばらば。次に。孟蘭盆
供養の。功德をもつて。父母および
び一切衆生に。回向し。ともに淨土に
生ぜんと。ねがふべし
ねがはくは。盆供所生の善をもつて。
父母劬勞の徳を。報答し。存せる者
は。富樂にして。壽きはまりなく。亡せ
る者は。苦をはなれて。安養に生じ

四恩三有もろく此含識三途八難を
 悉く此家生ごんに修熏とてくぬゆゑ
 障を滅しことごとく輪廻をいでて浄土
 小生せん
 回向しおほりなば至心に三禮して
 さらべし

孟蘭盆献供儀

〇二八

四恩三有。もろくの含識。三途八難。くる
 しみの衆生。ともに修熏を。かふふつて。罪
 障を滅し。ことごとく。輪廻をいでて。浄土
 に生ぜん
 回向しおほりなば。至心に。三禮して。
 さらべし

【孟蘭盆献供儀

〇二十八】

(白丁)

問辯附

有が問。前の請ずる文に。十方自恣得道僧衆といへるは。いかなる儀そや。曰。律に。前中後。三種の安居僧あり。しばらく。前安居の僧に。つゐていはゞ。四月十六日より。夏をむすび。七月十五日の。夜分つくる時。夏みつるなり。この一夏九旬の間。もろくの聖賢僧。をのく。道を修し。功德をつみ給ひて。その夏のをはりに。自恣の法

孟蘭盆献供儀

〇二十九

は。なり。此の。十方自恣得道僧家や。いふなり。此内に。菩薩僧あり。縁覚僧あり。聲聞僧あり。菩薩僧とい。視音。至。文殊。普賢。地藏。弥勒。等と。十方一切の賢聖僧なり。縁覚僧。聲聞僧とい。迦葉。阿難。舍利弗。目連等と。はじめ。十方一切の賢聖僧なり。此等乃。聖僧を。勸請して。供養すれば。その功德。小く。父母。六親。眷属。三途のくるしみ

問辯附

有が問。前の請ずる文に。十方自恣得道僧衆といへるは。いかなる儀そや。曰。律に。前中後。三種の安居僧あり。しばらく。前安居の僧に。つゐていはゞ。四月十六日より。夏をむすび。七月十五日の。夜分つくる時。夏みつるなり。この一夏九旬の間。もろくの聖賢僧。をのく。道を修し。功德をつみ給ひて。その夏のをはりに。自恣の法

【孟蘭盆献供儀

〇二十九】

を。なし給ふを。十方自恣。得道僧衆といふなり。此内に。菩薩僧あり。縁覚僧あり。聲聞僧あり。菩薩僧とい。視音。至。文殊。普賢。地藏。弥勒等をはじめ。十方一切の賢聖僧なり。縁覚僧。聲聞僧とい。迦葉。阿難。舍利弗。目連等をはじめ。十方一切の賢聖僧なり。此等の。聖僧を。勸請して。供養すれば。その功德。小く。父母。六親。眷属。三途のくるしみ

戒。よぬるまじく。淨土。天堂よ。生ずるなり。今
 世は。あやまりおほく。父母眷属の。亡。免を
 得。つるばかりにて。十方自恣僧を。供。養す
 る人。まれなり。このゆへに。父母をたすくる。
 功德も。またかならず。孟蘭盆經の。意にも
 あらざるにより。今の供儀に。くはしく。經によ
 りて。その供養の法を。あらはすもの也
 又とはく。自恣とは。いかなる儀ぞや。曰。聖者
 凡僧に通じて。おこなふ法なり。此法。律

孟蘭盆献供儀 ○三十

かくりを出し。但。大比丘乃。行。ところにして。
 未。受具戒人。の。なすわざにあらず。今。畧
 して。自恣と云義をいは。九旬安居の
 間。みづから。身心を精鍊すといへども。人お
 ほくは。おのれにまよひ。みづから。過をしら
 ず。このゆへに。安居のをはりにおるて。他人
 に對して。自己の過を。恣にあらはさしむ。
 これすなはち。自恣なり。聖僧は。鹿過
 なしといへども。諸佛の正軌なるがゆへに。

を。まぬかれて。淨土。天堂に。生ずるなり。今
 世は。あやまりおほく。父母眷属の。亡。免を
 得。つるばかりにて。十方自恣僧を。供。養す
 る人。まれなり。このゆへに。父母をたすくる。
 功德も。またかならず。孟蘭盆經の。意にも
 あらざるにより。今の供儀に。くはしく。經によ
 りて。その供養の法を。あらはすもの也
 又とはく。自恣とは。いかなる儀ぞや。曰。聖者
 凡僧に通じて。おこなふ法なり。此法。律

【孟蘭盆献供儀】 ○三十

にくはしく出たり。但。大比丘の行。ところにして。
 未受具戒人の。なすわざにあらず。今畧
 して。自恣と云義をいは。九旬安居の
 間。みづから。身心を精鍊すといへども。人お
 ほくは。おのれにまよひ。みづから。過をしら
 ず。このゆへに。安居のをはりにおるて。他人
 に對して。自己の過を。恣にあらはさしむ。
 これすなはち。自恣なり。聖僧は。鹿過
 なしといへども。諸佛の正軌なるがゆへに。

けそ低
をいふ

これの自恣れ法を、何れぬといふ
なり。佛舍利弗に對し、自恣乃
法とす。佛の法は、身口意の過
や。いなや、舍利弗のいよく、大千界の尊
何ぞ、過あらんと。佛すら、かくのごとし。いか
小いといふや。その餘の者をや。このゆへに
孟蘭盆會は、十方自恣得道聖賢
僧と。となへ請じて、供養するなり。又
をといふ。今世の凡僧なりとも。如説修行

孟蘭盆獻供儀 ○三十一

乃人をも、法と清して、供養ばさば。
いよく、可なりとす。
又とく、淫も、百味五果と。うけり人をも、どけ
る。その品いかに。曰、百味とは、大数なり。必
も、百色といふは、あらず。もし力の及ぶ
人をも、百味も、かぎるべからず。千味萬味と
をとり入べ。淫も、尽世甘美とあれば。
飲食、菓子等の、好味なるもの、おほく供
てく。可なり。又五果とは、一には、核果、棗

みなこの自恣の法を。なし給はずといふ
ことなし。佛、舍利弗に對し、自恣の
法をなして。のたまはく、身口意の過、なし
や。いなや、舍利弗のいはく、大千界の尊
何ぞ、過あらんと。佛すら、かくのごとし。いか
にいはいむや。その餘の者をや。このゆへに。
孟蘭盆會には、十方自恣得道聖賢
僧と。となへ請じて、供養するなり。又
たとひ、今世の凡僧なりとも。如説修行

【孟蘭盆獻供儀】 ○三十一

の人は、これを請じて、供養をなさば。
いよく、可なるべし
又とはく、經に、百味五果を、そなへよと。とけ
り。その品いかに。曰、百味とは、大数なり。必し
も、百色と。いふにはあらず。もし力の及ぶ
人は、百味にも、かぎるべからず。千味萬味を
もそなふべし。經に、尽世甘美とあれば。
飲食、菓子等の、好味なるもの、おほく供
して、可なり。又五果とは、一には、核果、棗

原本の31オ・31ウ重出。

┌ 31ウ

┌ 31オ

杏桃李の類。二は膚果。瓜梨柰。三には穀果。胡桃石榴の類。四には
 糲果。松拍子。藕荏の類。五には角果。豆の類なり。此五果も。生にて食するに
 たへざるものは。煮調して供ずべし。
 たゞし。精霊をまつることは。自恣
 聖僧の。供養に。異なれば。今ま
 でまつりしがごとく。つとめおこなふ事
 さまざまべからず

孟蘭盆献供儀 ○三十一

又とく。世の耽み成りて。供養せよと
 いふ。返つて。世の及びるから。曰。盡
 といふ。兩意あり。も。富人を。天下の奇
 迹を。貧者を。一己の力量とす。と
 して。それ自恣僧と供して。救済を
 乞ふ。もとより。誠をつくすことを。たつ
 とむ。自恣僧の供をうけ給ふも。亦た
 それ誠に應じて。はじめより。物の多少
 を論ずることなし。書にいはく。鬼神常

杏桃李の類。二には。膚果。瓜梨柰。三には穀果。胡桃石榴の類。四には
 糲果。松拍子。藕荏の類。五には。角果。豆の類なり。此五果も。生にて食するに
 たへざるものは。煮調して供ずべし。
 たゞし。精霊をまつることは。自恣
 聖僧の。供養に。異なれば。今ま
 でまつりしがごとく。つとめおこなふ事
 さまざまべからず

【孟蘭盆献供儀】 ○三十一

又とはく。世の甘美を尽して。供養せよと
 いはゞ。まづしきものは。及びかたからん。曰。盡
 といふに。兩意あり。もし富人は。天下の奇
 迹をつらね。貧者は。一己の力量をつく
 すべし。それ自恣僧を供して。救済を
 乞には。もとより。誠をつくすことを。たつ
 とむ。自恣僧の供をうけ給ふも。亦た
 その誠に應じて。はじめより。物の多少
 を論ずることなし。書にいはく。鬼神常

小亭なり。克誠ありはうく。いとや
 三寶とや
 又問。自恣僧と供養して。その力より
 て。亡者とするふとならば。その亡者には。飯
 食と供を飯し。或や。日自恣僧と供養
 供養するに。飯を供して。亡者のま
 けりのみをして。たれりとおもふは。あやま
 りなり。丁寧。自恣僧を。供養した
 るうへには。亡者に供すること。何ぞさまたげ

孟蘭盆献供儀
 〇三十三

む。変食の真言等をもつて。これを加
 持し。父母。乃至。萬靈に。供養せむこと。む
 べなり。變食の真言は。すなはち下に。出すところの。無量
 威徳自在光明勝妙力陀羅尼。これなり
 又問。この盆供は。非時にも。修すべきや。曰。
 凡僧すら。非時に食せず。いはんや。自恣の
 賢聖をや。かならず。日中前におゐて。供
 養を修すべし。律の中に。朝の明相より。
 日中前を。時と名づけ。日中より。明相い
 まだ出ざる前を。非時となづく。とけり。

に享るなし。克誠あるをうくと。いはんや。

三寶をや

又問。自恣僧を供養して。その力により

て。亡者をすくふとならば。その亡者には。飯

食を供すまじきや。曰。自恣僧を請じて。

供養することを知らずして。たゞ亡者の。ま

つりのみをして。たれりとおもふは。あやま

りなり。丁寧に。自恣僧を。供養した

るうへには。亡者に供すること。何ぞさまたげ

【孟蘭盆献供儀】
 〇三十三

む。變食の真言等をもつて。これを加

持し。父母。乃至。萬靈に。供養せむこと。む

べなり。變食の真言は。すなはち下に。出すところの。無量

威徳自在光明勝妙力陀羅尼。これなり

又問。この盆供は。非時にも。修すべきや。曰。

凡僧すら。非時に食せず。いはんや。自恣の

賢聖をや。かならず。日中前におゐて。供

養を修すべし。律の中に。朝の明相より。

日中前を。時と名づけ。日中より。明相い

まだ出ざる前を。非時となづく。とけり。

誠まことまうくべしなり
 又またこりて七月十五日を佛ぶつ歡くわん喜ぎ日にちといふ
 ち。いづなり義ぎぞや。曰いはく佛ほとけもと。世よに出いで給たま
 ぬ。とハ。そ。人ひとをして。善ぜん業ごうを修しゆせし
 りむ。さ。り。人ひとの悪あくを
 くらひ。そ。を。修しゆするをみて
 乃すなはち。佛ほとけの。本ほん意いにかなひて。ことことに歡くわん喜ぎし
 給たまふなり。このゆへに。この日ひにおゐて。盆ぼん
 供くをまふくれば。その福ふく甚はなだおほ
 むかし。もろこしに。慧え達だつ法ぽう師しといふ人ひとあり。
 俗ぞくたりし時とき。たちまち暴ぼう死しす。心こころに煙えん氣き
 あるをもつて。家か人じんこれを葬はならず。七なな日にち
 をへて。蘇よみがへりて。いはく。われ。冥みやう界かいにいたる
 に。金こん色じきの聖しやう人じんをみる。かたはらの人のいはく。

孟蘭盆献供儀

〇三十四

【孟蘭盆献供儀】

〇三十四

よろしく。時中じちゆうにおゐて。種々しゆくの供養くやう
 を。まうくべきなり

又またとはく。七月十五日を。佛ぶつ歡くわん喜ぎ日にちといふ
 は。いかなる義ぎぞや。曰いはく。佛ほとけもと。世よに出いで給たま
 ふことは。たゞ人ひとをして。善ぜん業ごうを修しゆせし
 めむが。ためなるをもつて。人ひとの悪あくを
 くるをみては。かなしみ。善ぜんを修しゆするをみて
 はよろこび給たまふ。七月十五日には。もろく
 の僧衆そうじゆ。一夏いちげ九旬くしゆんの要期ようごおはりて。

戒定慧かいぢやうゑの学がく。をのく。得うるところあれ
 ば。佛ほとけの。本意ほんいにかなひて。ことことに歡喜くわんぎ
 給ふなり。このゆへに。この日ひにおゐて。盆ぼん
 供くをまふくれば。その福ふく甚はなだおほ
 むかし。もろこしに。慧え達だつ法ぽう師しといふ人ひとあり。
 俗ぞくたりし時とき。たちまち暴ぼう死しす。心こころに煙えん氣き
 あるをもつて。家か人じんこれを葬はならず。七なな日にち
 をへて。蘇よみがへりて。いはく。われ。冥みやう界かいにいたる
 に。金こん色じきの聖しやう人じんをみる。かたはらの人のいはく。

これ観世音菩薩なりと。われ禮し
 とつた。善降をわに説法して。つど
 てのほく。凡亡人のつを。福とま
 き。或は寺。あるひは家中にもあれ。七月
 十五日。沙門自恣の日におあわく。信とあ
 くれ。その福。いよくまさされり。もし供粮物
 と。制して。そなへば。かならず器くに。標
 題して。某の亡人のために。三寶に奉
 上すと。いふべし。福施いよくおほしと。ま

孟蘭盆献供儀 ○三十五

した。信せざるべけんや
 又問。孟蘭盆供と。生飯と。施餓鬼との
 縁起別なりや。いはく。孟蘭盆供は。前
 小あすがごとく。目連尊者の母をすく
 ひしより。はじめれり。生飯の事は。鬼子
 母におこれり。鬼子母。つねに。人の子をとつて。
 殺斃す。佛方便をもつて。鬼子母の。子
 を。とりかくし給ふ。鬼子母かなしみ。佛に
 したがひて。その子をもとむ。佛つけて。のた

これ観世音菩薩なりと。われ禮し

をはるに。菩薩。ために説法して。つげ

てのたまはく。凡亡人のために。福をまう

けば。或は寺。あるひは家中にもあれ。七月

十五日。沙門自恣の日におあて。供をまう

くれば。その福。いよくまさされり。もし供粮物

を。制して。そなへば。かならず器くに。標

題して。某の亡人のために。三寶に奉

上すと。いふべし。福施いよくおほしと。ま

【孟蘭盆献供儀】 ○三十五

ことに。信せざるべけんや

又問。孟蘭盆供と。生飯と。施餓鬼との

縁起別なりや。いはく。孟蘭盆供は。前

にあかすがごとく。目連尊者の。母をすく

ひしより。はじめれり。生飯の事は。鬼子

母におこれり。鬼子母。つねに。人の子をとつて。

殺斃す。佛方便をもつて。鬼子母の。子

を。とりかくし給ふ。鬼子母かなしみ。佛に

したがひて。その子をもとむ。佛つけて。のた

返く。母子を愛す。他人もまた。かくのごとし。
今より後。人の子を。殺戮することをやめば。
汝に子をあたへむと。鬼子母のいはく。まさ
に佛の。教誡のごとくにすべしと。佛すな
はち。三帰五戒をさづけ給ふ。鬼子母の云
く。今より我。および諸子。何をか食とせん。
佛のたまはく。うれふることなかれ。剋部
洲におゐて。我才子。食する次ごとに。食
をいだして。汝にほどこし。皆飽満せしめん。

孟蘭盆献供儀

〇三十八

鬼子母のいはく。我今。如来に歸し。佛の
教誡をうく。あて違越せじ。王舎大城。
にたはもろくは生土。一切人民の。生ずる
ところ。我れ。擁護して。安樂な
らしめ。一切もろくの。悪鬼神をして。
さはりを。なさしめじといへり。次に施餓鬼は。
焰口餓鬼。經等に。見えたり。阿難尊者。
ひとり静處に居す。焰口餓鬼。きたり。
告ていはく。三日の後。汝が命つきて。此餓

【孟蘭盆献供儀

〇三十八】

鬼子母のいはく。我今。如来に歸し。佛の
教誡をうく。あへて違越せじ。王舎大城。
および。もろくの国土。一切人民の。生ずる
ところの男女。我みな。擁護して。安樂な
らしめ。一切もろくの。悪鬼神をして。
さはりを。なさしめじといへり。次に施餓鬼は。
焰口餓鬼。經等に。見えたり。阿難尊者。
ひとり静處に居す。焰口餓鬼。きたり。
告ていはく。三日の後。汝が命つきて。此餓

鬼乃中ふぞすべし。阿難。この言とて。大に
おそれ。餓鬼。とふていはく。何の方便
をもつてか。この苦しみを。まぬかるべき。餓
鬼のいはく。もしよく。百千那由他。恒河沙
数の餓鬼。ならびに。百千の婆羅門。仙等
に。魔訶陀国に。用ゆるところの。斛をもつて。
をのく。一斛の飲食を。ほどこし。又わがた
めに。三寶を供養せば。汝が壽。ますことを
え。我もまた。餓鬼のくるしみを。はなれ。天

五蘭盆献供儀 ○三七

上。せりり。何難。この言とて。大に
おそれ。餓鬼。とふていはく。何の方便
をもつてか。この苦しみを。まぬかるべき。餓
鬼のいはく。もしよく。百千那由他。恒河沙
数の餓鬼。ならびに。百千の婆羅門。仙等
に。魔訶陀国に。用ゆるところの。斛をもつて。
をのく。一斛の飲食を。ほどこし。又わがた
めに。三寶を供養せば。汝が壽。ますことを
え。我もまた。餓鬼のくるしみを。はなれ。天

鬼の中に。生ずべしと。阿難聞て。大に
おそれ。餓鬼に。とふていはく。何の方便
をもつてか。この苦しみを。まぬかるべき。餓
鬼のいはく。もしよく。百千那由他。恒河沙
数の餓鬼。ならびに。百千の婆羅門。仙等
に。魔訶陀国に。用ゆるところの。斛をもつて。
をのく。一斛の飲食を。ほどこし。又わがた
めに。三寶を供養せば。汝が壽。ますことを
え。我もまた。餓鬼のくるしみを。はなれ。天

【五蘭盆献供儀 ○三十七】

上に。生ずることをえむと。阿難。この言を聞
すみやかに。佛の所にいたり。さきのごとく。
つぶさにまうす。佛のたまはく。汝おそるゝ
ことなかれ。我に陀羅尼あり。無量威徳自
在光明勝妙力と。名づく。もし此陀羅尼
を。誦することあるものは。すなはちよく。俱
毘那由他。百千恒河沙数の。餓鬼および。
婆羅門。僊等に。上妙の飲食を。充足
せしむ。乃至。陀羅尼を説て。のたまはく。

曩莫。薩嚩怛佉。躡路枳帝。唵。三跋羅
三跋羅。眞言あり。誦持すれば。越法の罪。また仏
阿難に告げて。のたまはく。若比丘。比丘尼。優
婆塞。優婆夷。あつて。つねに。此眞言。
および。四如來の。名号をもつて。食を加
持し。餓鬼に施せば。すなはちよく。無量
の。福德を。具足し。百千俱胝の。如來を。
供養する功德と。ことなることなく。壽命
延長にして。色力をまし。善根具足す。一

孟蘭盆獻供儀

〇三十八

切非人。夜叉羅刹。もろくの。惡鬼神。侵
害すること。あることなしと。云く。これ孟
蘭盆と。生飯と。施食と。縁起別なる
ものなり。今時。一混して。執行するは。
あやまりなり
又とはく。梵網經に。孝を名づけて。戒とす
と。いふは。いかなる義ぞや。曰。孝道に。をのづ
から。戒の義を具せり。父母に孝なる人。
氣はくだし。聲を怡しめて。言さかふこと

【孟蘭盆獻供儀】 〇三十八

切非人。夜叉羅刹。もろくの。惡鬼神。侵
害すること。あることなしと。云く。これ孟
蘭盆と。生飯と。施食と。縁起別なる
ものなり。今時。一混して。執行するは。
あやまりなり
又とはく。梵網經に。孝を名づけて。戒とす
と。いふは。いかなる義ぞや。曰。孝道に。をのづ
から。戒の義を具せり。父母に孝なる人。
氣をくだし。聲を怡しめて。言さかふこと

戒なり。口戒なり。昏に温め。夏は清しめ。
 昏に定め。晨に省み。事さかふことなき
 は。これ身戒なり。愛をいだきて。しかも。う
 やまひ。身をふるまで。ふかくしたひ。心
 さかふことなきは。これ意戒なり。古人の
 いはく。五戒とは。はじめを。不殺といひ。次を。
 不盗といひ。次を。不邪淫といひ。次を。不
 妄語といひ。つぎを。不飲酒といふ。それ
 殺は。仁なり。不盗は。義なり。不邪淫は。禮也
 殺は。仁なり。不盗は。義なり。不邪淫は。禮也

五蘭盆献供儀

〇三十九

不飲酒は。智なり。不妄語は。信なり。この
 五つのもは。修するときは。その人を成じ。
 それ親をあらはす。また孝ならずや。こ
 の五つのもは。一つも修せざるときは。其
 身をすて。其親をはづかしむ。また不孝
 ならずやと。こゝにしりぬ。孝を行ずる人。
 戒をたもたずは。至孝と名づけがたきこと
 を。まして。一切衆生は。皆わが。生々の父母な
 れば。衆生に孝順して。殺盗等の。悪事

【五蘭盆献供儀

〇三十九】

不飲酒は。智なり。不妄語は。信なり。この
 五つのもは。修するときは。その人を成じ。
 その親をあらはす。また孝ならずや。こ
 の五つのもは。一つも修せざるときは。其
 身をすて。其親をはづかしむ。また不孝
 ならずやと。こゝにしりぬ。孝を行ずる人。
 戒をたもたずは。至孝と名づけがたきこと
 を。まして。一切衆生は。皆わが。生々の父母な
 れば。衆生に孝順して。殺盗等の。悪事

乃がさか。これ戒あり。要はもつて。これ
 といふ。孝順なきは自然。
 梵行具足す。菩薩の。三聚淨戒と
 いふ。この孝は。いづれを。おこなふと
 佛祖の。おしへをはかるに。おこなふと
 戒は諸佛の。通戒なれば。かならず是
 を。あふぐべき事にこそあめれ。いかにいはん
 や。孝を名づけて。戒とすと。教へ給ひて。孝

孟蘭盆献供儀

〇三十七

と戒。り。これ戒なり。要はもつて。これ
 といふ。孝順なきは自然。
 梵行具足す。菩薩の。三聚淨戒と
 いふ。この孝は。いづれを。おこなふと
 佛祖の。おしへをはかるに。おこなふと
 戒は諸佛の。通戒なれば。かならず是
 を。あふぐべき事にこそあめれ。いかにいはん
 や。孝を名づけて。戒とすと。教へ給ひて。孝

のなきは。これ戒なり。要をもつて。これ
 をいはゞ。たゞよく。孝順なれば。自然に。
 梵行具足す。菩薩の。三聚淨戒と

いへども。この孝をいでざるをや。おろく
 佛祖のおしへをはかるに。おこなふと
 は。いづれのおこなひを。なす人にもあれ。
 戒は諸佛の。通戒なれば。かならず是
 を。あふぐべき事にこそあめれ。いかにいはん
 や。孝を名づけて。戒とすと。教へ給ひて。孝

【孟蘭盆献供儀

〇四十】

と戒と。もとよりはなれざるをや。さればこそ
 古人も。天下福を欲はゞ。孝を篤うするには
 しかず。孝をあつうするは。戒を修するには
 しかず。戒は大聖人の。正勝の法なり。清淨
 意をもつて。これを守るときは。その福。左
 右にとるがごとしといへり。人々。この理を心
 えて。孝と戒と。ならべ修するときは。みづから
 殊勝の功德を。うるのみにあらず。ひそかに
 また。国家の正政をたすくるをや。むかし宋の

文帝ぶんていぞれ何なに尚しやう之しよ。いひていはく。ちか
 ごろ。顔延之がんえんし。宗炳そうへいが。論ろんをあらはすを。みるに。
 佛法ぶつぽうを發明はつめいして。人意じんいを開獎かいしやうす。もし
 率土そつとの濱ひんをして。みなこの化くはを。感かんぜしめ
 ば。朕ちんすなはち。坐あながら。太平たいへいをいたさんと。
 尚しやう之し。すゝむでいはく。それ百家はっかの卿きやう。十人
 五戒かいをたもつときは。十人淳謹じゆんきんなり。千室せんしつ
 の邑ゆう。百人十善じゆんじゆんを修しゆするときは。百人和睦くわぼく
 す。この風教ふうけうを持じしてもつて。寰區くわんくに。あ

孟蘭盆献供儀

〇四十一

返へんひうせば。編戸へんこ。億千おくせんなるときは。仁人百
 万まんならん。それよく。一善ぜんを行おこなふときは。一悪あく
 とあり。一悪あくをさるときは。一刑けいをやむ。一
 刑家けいけをやめば。萬刑ばんけい。國くににやむ。陛下へいかの。坐あな
 がら。太平たいへいを。いたすといふ。これなりといへり。
 これすなはち。一孝かうたて立たば。諸戒しよかいそなはり。諸戒しよかい
 おこなはれて。天下てんか安寧あんねいなり。はなはだし
 いかな。孝かうの義ぎたること。大なることや

孟蘭盆献供儀

〇四十一

まねうせば。編戸へんこ。億千おくせんなるときは。仁人百
 萬まんならん。それよく。一善ぜんを行おこなふときは。一悪あく
 をさる。一悪あくをさるときは。一刑けいをやむ。一
 刑家けいけをやめば。萬刑ばんけい。國くににやむ。陛下へいかの。坐あな
 がら。太平たいへいを。いたすといふ。これなりといへり。
 これすなはち。一孝かうたて立たば。諸戒しよかいそなはり。諸戒しよかい
 おこなはれて。天下てんか安寧あんねいなり。はなはだし
 いかな。孝かうの義ぎたること。大なることや

本師安養和尚所編 孟蘭盆獻
 供儀壹本授諸剎嗣永傳于世
 伏願人人起孝順心修蘭盆之
 供各各報父母德登菩提之場
 皆
 元祿庚午夏安居日諸弟子謹識

孟蘭盆獻供儀

〇四十二

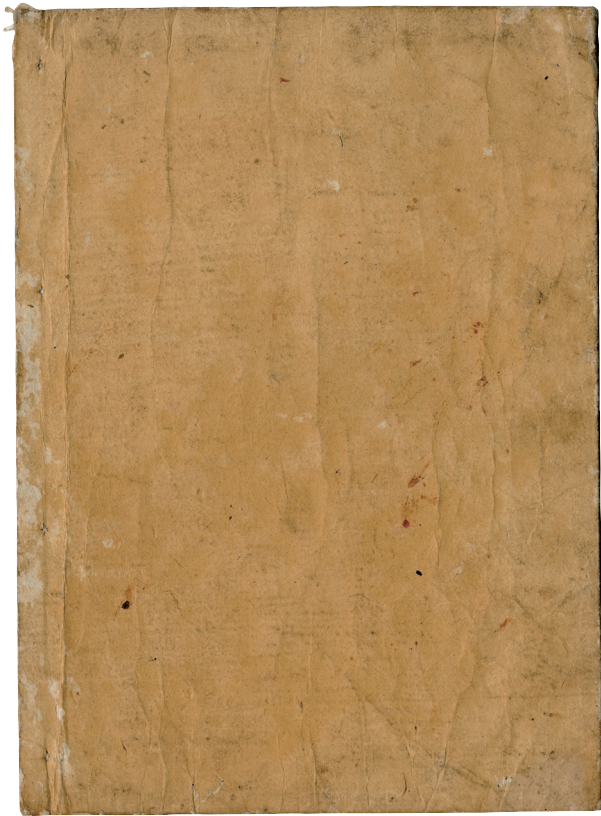
洛陽書肆梅村彌白鋟梓

本師安養和尚所編 孟蘭盆獻
 供儀壹本授諸剎嗣永傳于世
 伏願人人起孝順心修蘭盆之
 供各各報父母德登菩提之場
 皆
 元祿庚午夏安居日諸弟子謹識

【孟蘭盆獻供儀

〇四十二】

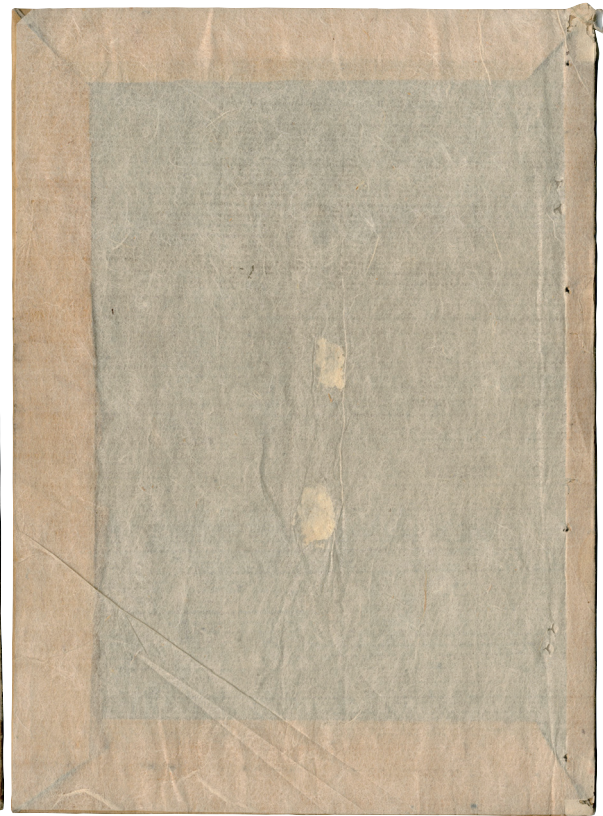
洛陽書肆梅村彌白鋟梓



(せきぐら
しずお

歴史文化学科)

「裏表紙



「裏表紙見返